

名古屋大学附属図書館医学部分館における
図書館間相互貸借 (ILL) の近年の傾向

Recent trends of Inter Library Loan (ILL)
in Nagoya University Medical Library

附属図書館医学部分館
Nagoya University Medical Library

安井裕美子
YASUI, Yumiko

Abstract

To understand the trend of ILL in Nagoya University Medical Library, the data of five years was analyzed. Five years mean 1999 and from 2001 to 2004. The data of 2000 was missing.

According to result, ILL in Nagoya University Medical Library has been decreased for 2001. On the other hand, NACSIS-ILL's data show different from Nagoya University Medical Library.

Recently, the movement that tries to change the flow of the academic publishing such as open accesses and the organization repositories become active. These activities will influence not only ILL but also role of the libraries and librarians.

1. 背景と目的

図書館間相互貸借 (ILL) は、利用者の求める資料を自館で所有していない場合に、利用者の求めに応じて、他館の資料をもって利用者に提供するシステムであり、サービスである。今日においては、雑誌種類数の増加、外国雑誌の価格高騰、書籍の出版点数の増加等により、必要とするすべての資料を自館で購入することがより困難であることから、学術図書館における ILL は、その機関における研究の推進に欠くことのできない手段である。

しかし ILL はあくまでも補完的なシステムであり、基本的には自館で必要とされる資料を揃える

べきであるとされてきた¹⁾。

近年、電子ジャーナル普及の影響により、自然科学系において ILL が減少傾向にあるとされている一方で、医学系では増加しているともいわれている。

一方で、電子ジャーナルの影響を受けにくいとされている人文系では、ILL はむしろ増加しているともいわれており、国立情報学研究所 (NII) が提供する NACSIS-ILL のレコード件数からは、全国的には増加の傾向にあることがわかる (ただし参加機関も増加しており、機関あたりのレコード件数は、必ずしも増加の傾向にあるわけではない)^{2, 3)}。

名古屋大学附属図書館は、電子ジャーナルの充実に力を入れており、2000年度より毎年タイトル数が増加し、2005年2月1日現在では、8,789タイトルが利用可能である。

一方で、オープンアクセスや機関リポジトリ、SPARC といった既存の学術出版の流れを変えようとする活動も活発であり、今後の動向が注目されている。冒頭で述べた通り、電子ジャーナルの普及に伴い ILL の動向に変化が生じているとされているように、これらの活動の方向性によっては、ILL もまた、影響を受けるであろう。

このような背景において、名古屋大学附属図書館医学部分館における ILL がいかなる状況にあるのか、その現状の把握を目的として、文献複写の依頼について、1999年および2001年から2004年までの5年間のデータを分析し、推移を示すとともに、その傾向について分析する。

依頼の状況は、当館利用者の情報要求の顕れであり、不足する資料を把握する根拠となるものである。このことから、依頼回数の多いタイトルや、発行後の経過年数による依頼頻度の変化についても検討し、購入タイトル数との関連について述べる。また、NII が提供する全国的な ILL システムである NACSIS-ILL との比較を行うと同時に、電子ジャーナル、オープンアクセスといった文脈において、ILL の将来を論じる。

なお、本稿では、仮説およびその検証という形ではなく、業務上の参考となるような形で現状を把握することを目的とした。そのために、事前に設定した、データの分析結果に関する予測と、分析の留意点を以下に示す。

(1) 依頼件数の推移 (年間・月間)

近年、医学部分館から他館への依頼件数が減少しているように感じられる。その事実関係を確認するとともに、増減の実態を明らかにする。

(2) 受付件数および全国の傾向との比較

受付件数と依頼件数の増減について、比較する。

依頼のほとんどが NII の提供する NACSIS-ILL を通しているのに対して、受付に関しては、NACSIS-ILL を通さないものが全体の数10%を占めている (医学系は他分野よりもこの数量が多いとされており、無視することのできない流れである)。しかしながら、NACSIS-ILL を通さないものはファクシミリで受信しており、データとして

の集計が困難であること、また、全体の傾向を検討するにあたって、NACSIS-ILL の参加館とそれ以外、という分類が可能であると判断した。

従って、実際に受け付けている件数は、ここで示される件数よりも多いと述べるに留めたい。

このことに関連して、NACSIS-ILL の料金相殺制度への参加館の増加について言及しておきたい。2004年度から料金相殺制度が新たになったことにより、NACSIS-ILL の料金相殺制度の参加館が増加している。参加館によっては、それに起因する依頼・受付件数の増減が生じているようである。このことについて、医学部分館に対する影響を明らかにするためには、依頼館の変化に関する考察が必要であるが、本稿の趣旨から外れるため、対象外とした。

(3) 同一タイトルへの依頼

(4) 依頼された文献の発行後の経過年数

同一タイトルや経過年数が浅い発行年への依頼が過多ではないか、分析を試みた。同一資料への依頼が多ければ、その資料の購入を検討すべきであり、経過年数が浅い発行年への依頼が多いタイトルについては、新規の購入を検討すべきである (注1)。

(5) 同一人物からの依頼

同一人物からの依頼がどの程度であるかを分析した。これは、医学部分館において、学内サービスとしての ILL がどのように利用されているのかを判断する手掛かりになるものである (医学部分館における ILL サービスの対象者は、名古屋大学の医学部・大学院医学系研究科および附属病院の所属者のみである)。

(6) 図書・雑誌の割合

依頼した文献のうち、図書・雑誌の割合を示した。医学系においては、速報性の高い雑誌が好まれることから、雑誌の割合が高いことが予測された。

(7) 受入雑誌と電子ジャーナル

業務上、外国雑誌の購入数の減少と、電子ジャーナルの契約タイトルの増加、および ILL 依頼件数の減少が連動している印象を受けるが、実際にそのような傾向にあるのかどうか、確認する。

また、依頼タイトルは外国雑誌が多い感触があるが、NACSIS-CAT の和雑誌・洋雑誌のファイルが統合されて「雑誌ファイル」に一元化されて

以来、データを機械的に和洋に判別する手段がない。また、何をもちて和・洋の別とするかは議論を呼ぶところである。出版地か、本文の記述言語か、あるいは他の要素か、何らかの判別基準を設定して、1件ずつ手作業で確認することも可能ではあるが、重要性は低いと考えられることから、今回は割愛した。

しかし、集計・分析にあたって用語の定義が必要となる個所が生じたことから、便宜的に定義を行った。すなわち、本稿における「和雑誌」とは出版地が日本国内である雑誌を指し、「洋雑誌」および「外国雑誌」は、出版地が日本国外であることを指す。

以上、データの集計および分析の留意点を述べた。その具体的な方法については、次項で述べる。

2. 方法

集計・分析に用いたデータは以下の2種類であり、その範囲と内容の相違について、次項で詳述する。

- (1) 医学部分館が NACSIS-ILL を通して行った ILL の詳細なデータ
- (2) NACSIS-ILL の全国データ

2.1 データ (1) 1 : 医学部分館における NACSIS-ILL を通して行った ILL の詳細なデータ

医学部分館における ILL の傾向を分析するために、名古屋大学附属図書館のローカルサーバに蓄積された、NACSIS-ILL を通して行った医学部分館における ILL (複写) の依頼データを分析した。

現存するデータの範囲は次のとおりである。1998年10月から1999年12月および2001年から現在まで(2000年1月から12月のデータは欠落している)。また、医学部分館における依頼の多くは外国雑誌が対象であると考えられるが、外国雑誌は年度ではなく暦年(1月から12月)を単位として発行され、契約されている。以上を踏まえて、分析は年度ではなく、暦年を単位として行うこととした。また、年単位での集計を基本とするために、1998年10月から12月のデータは割愛し、2000年を除く、1999年1月から2004年12月までの5年間を集計および分析の対象とした。

2.2 データ (2) : NACSIS-ILL の全国データ

医学部分館の傾向と、全国的な傾向とを比較するために用いた、NII が公開している NACSIS-ILL の全国データを以下にあげる(NII が公開しているデータはいずれも年度単位である)。

- (1) NACSIS-ILL 終了レコード件数²⁾

収録範囲：1992-現在

内容：NACSIS-ILL を通して成立した文献複写および貸借の総レコード数が年度別に集計されている。

- (2) NACSIS-ILL 利用統計(依頼レコード件数)⁴⁾

収録範囲：1992-2003

内容：NACSIS-ILL を通して成立した文献複写および貸借の総レコード数と、参加機関数の推移。

- (3) NACSIS-ILL 依頼・受付件数一覧⁵⁾

収録範囲：1994-現在

内容：各機関の依頼・受付件数が年度別に集計されている。

2.3 方法

前述の2種類のデータを用いて、医学部分館における ILL の傾向を明らかにし、全国的な傾向との比較を行った。

医学部分館のデータが暦年であるのに対して、NII が公開しているデータは年度であることに注意しなくてはならない。このため、比較が困難な個所もしばしば生じた。

依頼業務は、発注した文献の到着をもって、完了したと見なされる。このことから、医学部分館のデータの分析に際しては、NACSIS-ILL において「確認(RDATE)」コマンドが発行された日付を対象として、集計を行った。

さらに、医学系の ILL は一般的に複写が多く、貸借は少数であることから、今回の分析は複写のみを対象としており、貸借については、簡単な集計のみを行った。

ただし、複写対象となった文献の分析においては、雑誌だけではなく、図書も対象とした。集計には、Microsoft Access 2000 および Microsoft Excel 2000 を用いた。

3. 結果

本項では、データの集計および分析の結果を示す。

3.1 依頼件数の推移

(1) 医学部分館における依頼件数の推移

医学部分館における依頼件数の推移を図1に示す。

「件数」はNACSIS-ILLを通じた依頼を単純に集計したものである。「件数(補正後)」は、単発的な増加を考慮するために、同一人物による年間100件以上の依頼を割愛して集計したものである。

また、NACSIS-ILLを通さない依頼が年間10数件発生しているが、少数であることと、過去の記録については数値を正確に把握するのが困難であることから、割愛した。

図1からは、2001年に依頼件数が一時的に増加しているように読み取れる。しかし補正後のグラフから、それが特定個人による大量の依頼によるものであり、全体の傾向としては減少していることがわかる。

次に、月別の依頼件数について述べる(図2)。

これは、1999、2001-2004年のデータを月別に集計したものである。「件数(補正前)」は単純集計であり、「件数(補正後)」は特定の年・月に同一

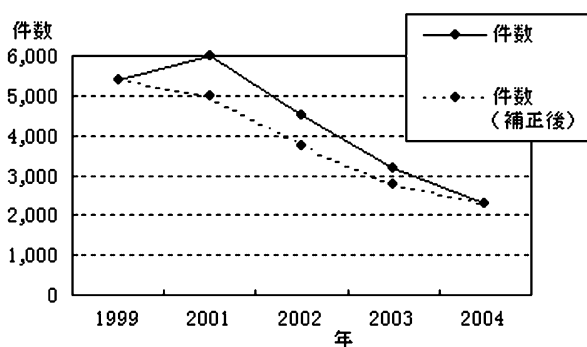


図1 依頼件数の推移 (年間)

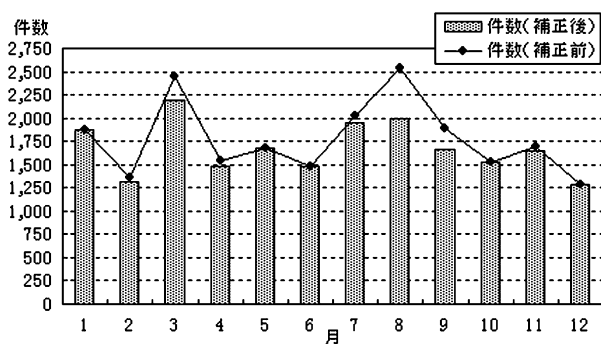


図2 依頼件数 (月別)

人物が行った50件以上の依頼を除いたものである。

2月と12月は比較的少なく、3月と7月、8月に比較的多いこと以外には、特筆すべき点は見当たらない。しかし、依頼件数の平均値の差は、最も多い月と少ない月では約182件であることから、このような傾向を正確に把握することは、業務計画、有用であると考えられる。

3.2 受付件数および全国の傾向との比較

NACSIS-ILLの全国データを集計した「NACSIS-ILL 依頼レコード件数」⁴⁾によると、1992年度以降、依頼レコードは増加し続けているが、参加機関数も増加している。表1に示すとおり、一機関あたりのレコード件数は、それ程増加している訳ではない。

図3では、「NACSIS-ILL 依頼・受付件数一覧」⁵⁾

表1 NACSIS-ILLにおける依頼件数の推移

年度	参加機関数	レコード件数		
		全国	機関あたり	
			件数	指数
1992	250	258,873	1035.5	100.0
1993	290	389,150	1341.9	129.6
1994	371	468,218	1262.0	121.9
1995	437	535,239	1224.8	118.3
1996	548	637,860	1164.0	112.4
1997	626	768,597	1227.8	118.6
1998	694	881,741	1270.5	122.7
1999	772	948,656	1228.8	118.7
2000	833	988,381	1186.5	114.6
2001	878	1,037,974	1182.2	114.2
2002	908	1,043,529	1149.3	111.0
2003	917	1,060,552	1156.5	111.7

※「NACSIS-ILL 依頼レコード件数」⁴⁾より作表

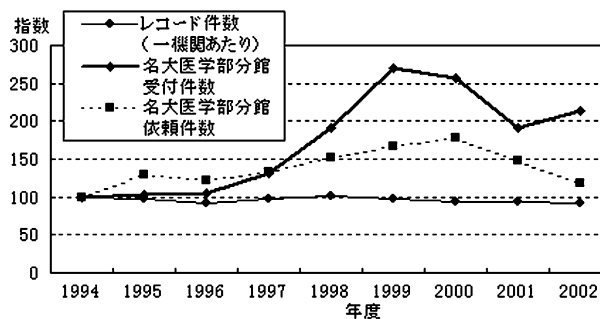


図3 1994年を基点としたレコード件数 (指数)

※医学部分館の依頼・受付数は「NACSIS-ILL 依頼・受付件数一覧」⁵⁾による

による医学部分館における依頼件数と受付件数、および「NACSIS-ILL 終了レコード件数」²⁾ から算出した、一機関あたりのNACSIS-ILL 終了レコード件数の指数を示した。期間は1994年度から2002年度までの9年間である。

2001年度の受付件数が目立って少ないのは、医学部分館の改修工事によるものと考えられる。2001年7月1日から9月24日までの約3ヶ月間は休館しており、館内の資料が利用できない状況であったため、ILLの受付を行っていなかった。ただし、依頼業務は通常通りに行っていた。

図3からわかることは、医学部分館における受付は1999年をピークとして、依頼は2000年をピークとして、以後は減少している。しかし、2003年の受付件数は、基点とした1994年の倍以上であり、依頼件数にしても、ほぼ同数まで減少したに過ぎない。

3.3 同一タイトルへの依頼

医学部分館における、5年間の同一タイトルへ

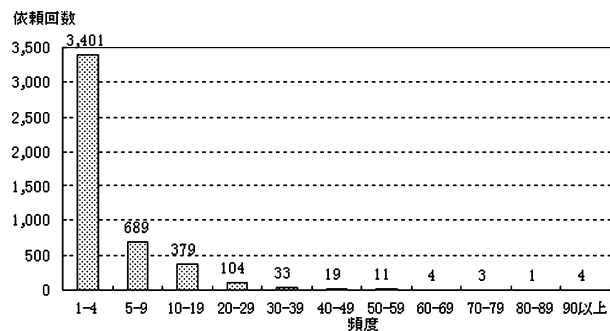


図4 同一タイトルへの依頼件数

表2 同一タイトルへの依頼回数：年別の集計

依頼回数 \ 年	1999	2001	2002	2003	2004
1	975	1,123	1,071	917	828
2	342	439	369	291	217
3	201	251	163	110	103
4	114	114	118	80	41
5	86	71	60	32	21
6	43	64	42	29	12
7	31	46	15	18	9
8	25	33	16	5	8
9	23	18	14	7	5
10	14	20	12	8	1

(中略)

最大依頼回数	46	38	51	37	29
--------	----	----	----	----	----

の依頼件数を集計した。図4は、それを簡単にまとめたものである。

依頼回数が少ないものとしては、1回限りの依頼が1,944タイトル、2回が738タイトル、3回が466タイトルと、回数を増すごとにタイトル数は減少する。また、依頼回数が多いものとしては、101回が2タイトル(洋雑誌)、118回が1タイトル(洋雑誌)、157回が1タイトル(和雑誌)である。

なお、誌名の変遷は考慮していない。

さらに詳細に観察するために、年別の集計を行った(表2)。

いずれの年においても、同一タイトルへの依頼は、依頼回数を増すごとに減少している。

前述のとおり、依頼回数が多いタイトルとしては、5年間で100回を超えるタイトルが4タイトル存在する。また、年別に見ても、最大で51回の同一タイトルへの依頼が生じている。このことについては、次項の末尾で詳しく述べたい。

3.4 依頼された文献の発行後の経過年数

図5は、依頼年と文献の発行年の差が10年以内のデータを集計したものである。

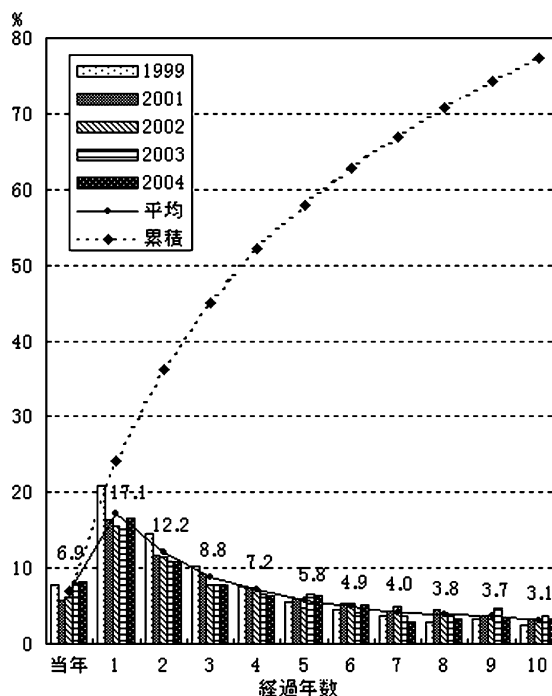


図5 発行後10年以内の巻号に対する依頼件数が占める割合

いずれの年度においても、1年前の発行年に対する依頼数がピークであり、以後、経過年数が増すごとに漸減する。

当年から4年前までに発行された文献への依頼数の累積が52.2%と過半数であり、当年から10年前までを累積すると、77.4%である。

「3.3 同一タイトルへの依頼」と「3.4 依頼された文献の発行後の経過年数」をもとに、任意の依頼年に特定の発行年に対する依頼件数が10件以上発生したタイトルを特定した(表3)。

複数回出現するタイトルはD、E*、Fの3タイトルであり、合計はそれぞれ23、34、22である。

延べ24タイトル、重複を除くと20タイトル、これらの依頼回数の合計は286件であり、全体に占める割合は1.3%である。最大でも年間の依頼は16件であり、過多とまでは言えない分量であるにしても、雑誌の刊行形態や掲載された論文数を考慮し、購入を検討する必要があると考えられる。

3.5 同一人物からの依頼

図6は、同一人物が依頼を行った回数を集計し

表3 特定のタイトル・発行年への依頼状況

雑誌タイトル	依頼年	発行年	依頼年と発行年の差	依頼件数
A*	1999	1990	9	14
B	1999	1995	4	12
C	1999	1997	2	13
D	1999	1997	2	11
E*	1999	1997	2	11
F	1999	1998	1	12
G	1999	1998	1	10
H	1999	1998	1	12
F	1999	1999	0	10
I	1999	1999	0	11
J	2001	1999	2	12
D	2001	2000	1	12
K	2001	2001	0	11
L	2002	1983	19	10
M*	2002	1995	7	15
N*	2002	1996	6	16
O	2002	2000	2	13
P	2002	2001	1	13
Q	2002	2001	1	10
E*	2002	2001	1	13
E*	2003	2002	1	10
R*	2003	2002	1	10
S	2004	1999	5	11
T	2004	2004	0	14
合 計				286

※「*」を付与したタイトルは和雑誌である

たものである。

全体の77.2%に相当する1,605名が一桁の依頼数であり、回数が増すごとに人数が減少する傾向にある。

このことから、ILL 依頼サービスは、特定の人物が多く利用しているわけではないといえる。しかし、広く利用されているかどうかは、ここから読み取ることができない。構成員数との比較等が必要である。

3.6 雑誌・図書の割合

医分館における依頼において、雑誌と図書の割合を調べた(表4)。

表4は全体的な集計であるが、年度別の集計では、図書は最小1.0%から最大1.7%であり、平均的な結果となっている。

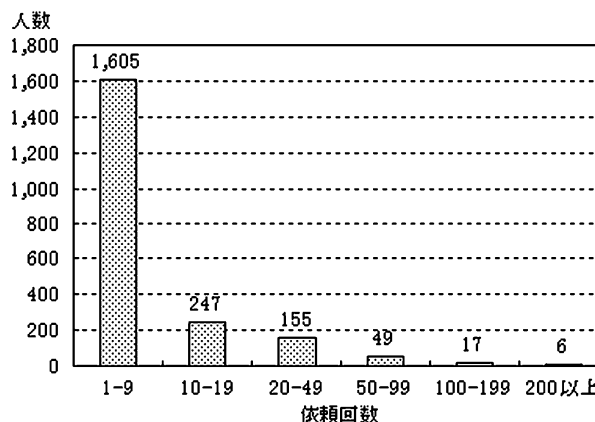


図6 同一人物による依頼回数

表4 依頼における雑誌・図書の割合

区分	件数	割合(%)
雑誌	21,044	98.64
図書	288	1.35
不明	3	0.01
合計	21,335	100.00

表5 貸借の依頼・受付件数

年	依頼	受付
2000	11	18
2001	16	12
2002	14	24
2003	15	32
2004	8	47
合計	64	133

※依頼は「返送日」により、受付は「返却日」によって集計を行った。

このことから、依頼の対象となる資料のほとんどは雑誌であることが確認された。

参考までに、相互貸借の件数を表5に示す。複写に比較して、少数であることがわかる。受付件数が増加しているのは、遡及入力によるNACSIS-CATへの登録が進められていることに起因すると考えられ、依頼館の多くは、医学系以外の領域を主題とする図書館である。

3.7 受入雑誌と電子ジャーナル

医学部分館における雑誌の受入種類数と、ILLの依頼件数、電子ジャーナルタイトル数の変化を図7に示した。

なお、本項における雑誌の受入種類数は館燈6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15)から、電子ジャーナルタイトル数は「平成15年度 利用統計(中央図書館)」¹⁶⁾から、ILL依頼件数は「NACSIS-ILL 依頼・受付件数一覧」⁵⁾から得た。

雑誌の受入種類数が緩やかに減少し、電子ジャ

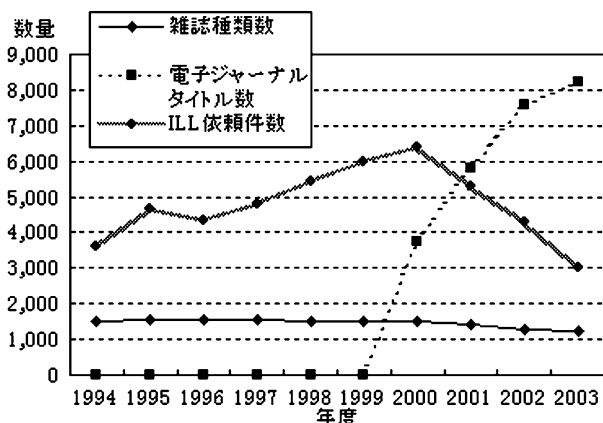


図7 受入雑誌数、電子ジャーナルタイトル数および依頼件数の比較

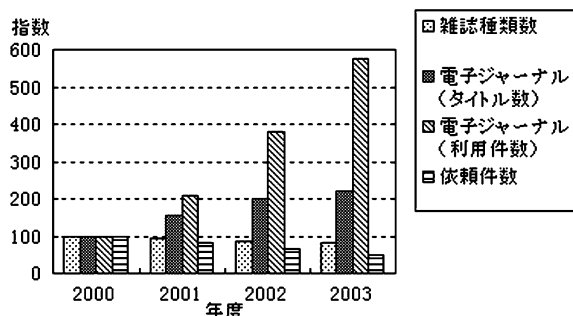


図8 受入雑誌数、電子ジャーナルタイトル数および依頼件数の指数による比較

ーナルのタイトル数が急激に増加するのに対して、ILLの依頼件数は2000年度をピークに減少している。

名古屋大学において電子ジャーナルが導入された2000年度を基点として、その増減を指数で表現した(図8)。

依頼件数と雑誌種類数が医学部分館のみのデータであるのに対して、電子ジャーナルのデータは名古屋大学全体のものである。従って、厳密な比較であるとは言えないが、電子ジャーナルのタイトル数および利用件数の増加に対して、雑誌種類数と依頼件数が減少していることがわかる。本項で用いたデータだけでは、これらの因果関係を論じることはできない。しなしながら、電子ジャーナルが導入された2000年度を境として、電子ジャーナルのタイトル数と利用件数が増加し続けているのに対して、医学部分館の雑誌の購入種類数とILL依頼件数が減少し続けていることは、興味深い現象である。

4. 考察

前項で示した結果に対して、考察を加える。なお、必要に応じて、複数の項目を組み合わせた。

- (1) 依頼件数の推移(年間・月間)
- (7) 受入雑誌と電子ジャーナル
- (2) 受付件数および全国の傾向との比較

増加・減少の傾向については、基点とする時点によって、異なる捉え方ができる。今回は、現存するデータを基に集計・分析を行った。その結果として言えることは、NACSIS-ILLの参加館および全国レコード数は、1992年から増加し続けているが、機関あたりのレコード数は、11.0%の増加率に過ぎない。また、医学部分館においては、依頼・受付ともに減少しているが、基点である1994年を下回ってはいない、ということである。

医学部分館における依頼件数が、近年減少傾向にある理由は、幾つか考えられる。別の手段で文献を入手しており、図書館に頼る必要性が低くなったのかも知れないし、何らかの理由で、そもそも文献を依頼する必要性が低くなったからかも知れない。

前者に関しては、研究者が文献を入手する手段が多様化していることから、考慮すべき問題であるし、医学部分館のILLサービスよりも他のサー

ビスが好まれる理由を知るべきである。

後者の場合は、電子ジャーナルを含む蔵書構築がうまくいっており、利用者の充足率が高く、学外の蔵書に頼る必要性が低いとも考えられる。この場合、受入雑誌数は減少していることから、研究者からの需要が減少したのではない限り、減少した受入雑誌数と依頼件数の合算よりも電子ジャーナルのインパクトが大きいことになる。

電子ジャーナルとの関係については、今回の分析に用いたデータは、受入雑誌数と依頼件数は医学部分館固有のデータであるのに対して、電子ジャーナルは名古屋大学全体のデータである。そのため、件数の増減に関して因果関係を分析するためにはデータが不足であるが、電子ジャーナルが増加し続けている一方で、雑誌の受入数と ILL の依頼件数が減少し続けていることは興味深い。

加藤は、文献のレビューを通して、“コンソーシアムによる電子ジャーナルの導入は文献デリバリーの減少に影響を与えている”としながらも、その詳細については、“包括的で精緻な個別大学レベルの調査報告が待たれるところである”としている¹⁷⁾。一方で、電子ジャーナル等の影響で ILL は増加傾向にあるという ARL の調査も紹介されている¹⁸⁾。

このように、ILL 件数の増減と電子ジャーナルの関係については様々な報告が存在する。全体的な傾向と、各館の個別の事情や傾向とは、区別して捉えられるべきであるが、本稿のような事例研究の積み重ねによって、電子ジャーナルが ILL に与えた影響や、これから与える影響について、解明されて行くだろう。

(3) 同一タイトルへの依頼

5年間に渡り依頼された延べ回数が9回以下のタイトルが88.0%を占めた。特定タイトルの特定の巻号に対して、年間でどの程度の依頼があればバックナンバーや新刊の購入を検討するべきなのか、という判断基準の問題は残るが、9割近くが一桁の依頼回数であることを鑑みて、少なくとも、医学部分館における資料が決定的に不足しているとは言えないと判断される。

(4) 依頼された文献の発行後の経過年数

当年から4年前までに発行された文献への依頼が過半数を占めることから、発行後の経過年数が比較的浅い文献の需要が多いことが確認された。

これは、蔵書のオブソレッセンスにも合致する現象である。購入タイトルの検討材料としては、「同一タイトルへの依頼」と組み合わせて考えるべきであろう。

(5) 同一人物からの依頼

サービスは広く浅く利用されていると考えられることから、サービス対象に偏りが生じていないことを確認した。一方で、特定人物あたりの依頼回数が少ないということは、何らかの理由でサービスに満足できなかったのか、繰り返し利用されなかったのかも知れない。

(6) 図書・雑誌の割合

元来、医学系の研究における資料の利用は速報性の高い雑誌が多いのであるが、同様に、ILL の依頼の対象となるのはほとんどが雑誌論文であることが確認された。

以上、「3. 結果」の項目に沿って、考察を加えた。

本稿における依頼データの分析は、概して単純なものである。現存するデータ範囲が5年分と狭い上に、2000年のデータが欠落している等、データの不備による限界もある。全国データと暦が異なることによる比較の困難もある。そもそも和雑誌が年度であるのに対して洋雑誌は暦年である、という具合に暦が異なる上に、個々のデータに関して、機械的に和洋の判別を行うことができず、データ処理による比較・検討が困難である。

NACSIS-ILL の傾向だけではなく、医学系図書館における全国的な傾向や、他分野の図書館における傾向等、他の調査と比較することにより、さらに詳しいことがわかるであろう。

5. 情報サービスや学術出版を巡る近年の動向

館種を問わず、図書館は、伝統的に利用者の自立を促す「利用者教育」を重んじてきた。利用者ガイダンスを始めとする、利用者教育ないし情報リテラシー教育は、あらゆる図書館で実施されており、医学部分館においても、20年近い実績がある^{19, 20)}。その一方で、臨床医学分野においては、情報専門職である Informationist が提唱されるなど²¹⁾、情報の仲介者としての図書館員の役割を再検討する動きもある。高度な情報専門職と図書館の利用者教育を比較することは必ずしも適切ではないかも知れないが、図書館員の役割について考

表6 申込者に返却された理由とその内訳

謝絶理由	割合 (%)
医学部分館の冊子体で入手可能	57.6
電子ジャーナルで入手可能	32.8
参照不完 (典拠を請求)	9.0
他の申し込みと重複	0.6
合計	100.0

えるにあたって、興味深い事例である。

2003年5月21日から9月22日 (ILL 業務日数は88日間) までに利用者から医学部分館へ申し込みのあった文献のうち、21.3%は他館へ依頼することなく、申込者に返却された。その内訳を表6に示した。

このように、利用者に返却された依頼の90.4%は、冊子体や電子ジャーナルで入手可能であり、自ら探し出すことができれば、すぐに入手できる文献であった。このことについては、無駄な依頼を減らすために利用者教育を強化するべきである、ともいえるし、多忙な研究者のために、図書館員が代わって調査するべきである、ともいえる。後者の場合は、とりあえず図書館に持ち込めば最終的には文献が入手できる、という流れを作ることでも可能であり、図書館の存在理由や存在価値の問題でもあろう。

近年、オープンアクセス出版や機関リポジトリといった、学術出版の流れを変えようとする動向が顕著である^{22, 23, 24)}。結果として、最新の研究成果を入手する手段が、従来の「逐次刊行物を購入し、所有する」という形態から離れた場合に、インターネット上に散在する研究成果をどのように入手するべきなのだろうか。

2004年11月18日には、学術情報に特化された検索エンジン Google Scholar (ベータ版)²⁵⁾ が公開された。従来は検索が困難であった、学術論文の検索に有用であるとされている²⁶⁾。

さらに、Open WorldCat program²⁷⁾ により、OCLCのOpen WorldCat を Yahoo! や Google で検索することが可能となった (Yahoo! はツールバーを提供している)。

これらの動向は、学術情報の流通に影響を与えるとされているが、ILL や図書館、図書館員の役割にも影響するだろう。

6. 結論

本稿では、医学部分館における最近の依頼データの分析を通して、その現状について検討した。その結果、近年は依頼件数が減少傾向にあること、発行後1年を経過した文献の需要が最も高く、後は経年変化とともに需要が低くなることが確認された。また、依頼状況に関して、現存するデータからは、特に問題となるような事柄は見当たらなかった。

依頼件数は確かに減少しているが、幾つかの理由から、医学部分館全体の業務量は減少していない。ひとつには、電子ジャーナル等、資料の形態が多様化したことによる様々なメンテナンスや利用指導が増加していること。もうひとつは、それらの変化が速いため、対応に要する業務量が年々増加していることである。

このように、図書館員が習得すべき知識や技量は増加する一方である。オープンアクセスや機関リポジトリなどといった動向を知っておくことは重要であるが、これらの動向は日々変化することから、将来を予測し、長期に渡る計画を立案するのは容易なことではない。現況を把握しつつ、軌道を修正して対応して行くことが必要であろう。

【注】

1) 『大学図書館間協力における資料複製に関するガイドライン』は、依頼の多い資料について購入努力義務の基準を設けている。該当箇所を引用する。

“(資料の購入努力義務)

9. 同一雑誌タイトル資料の過去3年間に発行された巻号からの複製依頼、又は同一書籍資料からの複製依頼を、1年間に11回以上行った依頼館は、その資料を購入する努力を行うものとする。”

・国公立大学図書館協力委員会。大学図書館間協力における資料複製に関するガイドライン。(オンライン), 入手先 <<http://www.soc.nii.ac.jp/anul/>>, (参照2005-09-15)。

【引用文献】

- 1) 諏訪敏幸. 学術図書館における自足性の後退と学術情報ユーティリティ: 逐次刊行物分野を中心に. 大学図書館研究. no. 57, 1999, p.1-21.
- 2) 国立情報学研究所. NACSIS-ILL 終了レコード件数. (オンライン), 入手先 <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/nill_stat_endrecord.html>, (参照2005-02-06).

- 3) 国立情報学研究所. NACSIS-ILL 利用統計 (参加機関数). (オンライン), 入手先 <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/nill_stat_particorg.html>, (参照2005-02-06).
- 4) 国立情報学研究所. NACSIS-ILL 利用統計 (依頼レコード件数). (オンライン), 入手先 <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/nill_stat_reqnum.html>, (参照2005-02-06).
- 5) 国立情報学研究所. NACSIS-ILL 依頼・受付件数一覧. (オンライン), 入手先 <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/nill_stat_reqrecpnum.html>, (参照2005-02-06).
- 6) 名古屋大学附属図書館. 平成6年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 119, 1995, p.11.
- 7) 名古屋大学附属図書館. 平成7年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 123, 1996, p.11.
- 8) 名古屋大学附属図書館. 平成8年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 126, 1997, p.7.
- 9) 名古屋大学附属図書館. 平成9年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 129, 1998, p.5.
- 10) 名古屋大学附属図書館. 平成10年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 132, 1999, p.7.
- 11) 名古屋大学附属図書館. 平成11年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 136, 2000, p.9.
- 12) 名古屋大学附属図書館. 平成12年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 140, 2001, p.7.
- 13) 名古屋大学附属図書館. 平成13年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 145, 2002, p.7.
- 14) 名古屋大学附属図書館. 平成14年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 149, 2003, p.7.
- 15) 名古屋大学附属図書館. 平成15年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数. 館燈: 名古屋大学附属図書館報. no. 152, 2004, p.9.
- 16) 名古屋大学附属図書館. 平成15年度 利用統計 (中央図書館). (オンライン), 入手先 <<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/tokei/riyo03.pdf>>, (参照2005-02-06).
- 17) 加藤信哉. 電子ジャーナルのコンソーシアム利用が大学図書館の文献デリバリーへ及ぼす影響. カレントアウェアネス. no. 281, 2004年9月20日, CA1530. (オンライン), 入手先 <<http://www.ndl.go.jp/jp/library/current/no281/doc0002.htm>>, (参照2005-02-06).
- 18) Jackson, Mary E. Will electronic Journals eliminate the need for ILL?. *Interlending & Document Supply*. vol. 32, no. 3, 2004, 192-193.
- 19) 安井裕美子. 図書館員による情報リテラシー教育支援: 医学部分館の取り組み. 名古屋大学附属図書館研究年報. no. 2, 2003, p.25-30.
- 20) 安井裕美子. 図書館員による情報リテラシー教育の支援: 質問紙の分析による評価. 名古屋大学附属図書館研究年報. no. 3, (投稿中).
- 21) 野添篤毅. Evidence-based Medicine 支援のための新しい情報専門職: Informationist の役割と活動. 医学図書館. vol. 50, no. 4, 2003, p.341-347.
- 22) 時実象一. オープンアクセスの動向. 情報管理. vol. 47, no. 9, 2004, p.616-624.
- 23) 熊谷玲美. オープンアクセス出版. 情報管理. vol. 47, no. 1, 2004, p.33-37.
- 24) 高木和子. 機関レポジトリ. 情報管理. vol. 46, no. 6, 2003, p.405-411.
- 25) Google. "Google Scholar BETA". (online), available from <<http://scholar.google.com/>>, (accessed 2005-02-06).
- 26) 遠藤昌克. 学術情報検索における, 検索エンジン Google の進出. 情報管理. vol. 47. no. 10, 2005, p.681-687.
- 27) OCLC. "WorldCat: Open WorldCat program". (online). available from <<http://www.oclc.org/worldcat/open/default.htm>>. (accessed 2005-02-06)